

上海「ミニ」通信

(北九州市 上海事務所から中国・上海の「今」をお伝えします！)

2018年は、改革開放40周年のメモリアルイヤーで、中国の至るところで、多くの記念イベントが行われました。

その中でも、広東省深圳市は最大の成功例として称賛され、「アジアのシリコンバレー」として海外からも注目されている地域です。

弊所は、深圳市政府主催の改革開放記念国際フォーラムに日本から唯一招待を受け、学研都市の取組を発表するなど、深圳市と親しくお付き合いしています。本稿では、そこで知った深圳市の歴史などを整理しつつ、その勢いをどう活かせるかを考えてみます。

2019年1月15日

【第19回】『来ればみんな深圳人～移民都市・深圳の力の源泉～』について

【今日のポイント】

- ◆ 改革開放の波は40年前、深圳市から始まった。この40年間で、『人口30万人の漁村』⇒『世界の工場』⇒『人口1250万人のイノベーション都市・アジアのシリコンバレー』に変貌。
- ◆ 成長の源泉は、外部人材を幅広く受け入れ、そこで自由な活動と競争をさせること。
- ◆ 北九州市内のスタートアップや中国人留学生との交流、市内企業の試作・製造のパートナーなど、深圳市の力を活用できる可能性は色々ある。

1 深圳市の発展の歴史

香港に隣接（現在では新幹線で約15分のほぼ通勤圏内）し、かつ政治の中心・北京から距離のある深圳市が1979年に改革の最初の実験場となりました。その後の歩みは…

1980年代 深圳市は経済特区として、労働集約型産業を中心に輸出加工拠点として成長。

80年代後半 特区内で個人の特許、現金を元手に民営企業の設立を認める。この頃、ファーウェイ、ZTEなどの現在のハイテク企業が誕生。

90年代 PC、携帯電話の普及にあわせて産業の高度化を目指す。しかしいまだ輸出加工拠点、海外ブランドのニセ物製造地のイメージから脱却できず。モバイル決済ツール・ウィーチャットで有名なテンセントがこの頃深圳市に誕生。

2010年代 政府は産業構造転換の起爆剤として「大衆創業、万衆創新（大衆による創業、万衆によるイノベーション）」戦略を打ち出し創業支援を強化。深圳市では、それまでの電子部品の加工産業の集積を活かし、製造業の高度化に資する創業、海外からの人材、企業・大学などの研究開発拠点誘致に対する補助を強化。

現在 海外留学を経験した中国人に特化した起業支援施設を作るなど、他都市より半歩先を行く施策を打ち、国内外から優秀でユニークな人材確保に努めている。

深圳市はこの40年間で人口は40倍に膨れ上がっており、現在の人口の多くは外国人を含む外部からの流入者（移民）です。深圳市は「来了就是深圳人（来ればみんな深圳人）」と言われるほど外部からの流入者を幅広く受け入れ、彼らを都市の活性化に活用しています。

一方、生存競争も激しく、起業家への政府からの支援は3年と決められ、そこで目が出なければ支援は終了。まさに多産多死ですが、それが都市の活力にもなっています。深圳市政府幹部も「行政がお手伝いできるのは最初の部分のみで、あとは自助努力。行政が余計なことをやりすぎるとうまくいかないと言っていました。」



40年前の深圳



現在（「深圳スピード」でまだまだ拡大中！）



2 これを本市で活かせるか？

中国の中でも「深圳スピード」と言われる速い変化を我々が真似るのは容易ではありません。しかし、市内のスタートアップや企業、本市で学ぶ中国人留学生との交流

など、アイデア次第では深圳市のパワーを活かす手段はあると思います。私もこの地域のことをもっと勉強したいと思いますが、皆様の中で、深圳を活かすアイデアがあればぜひご提案ください。

本稿へのご意見、弊所へのご要望等あれば、ぜひ北九州市上海事務所 山口 (yamaguchi@beijizhou.com) までお願いいたします。